

昭和四十三年三月

熊本県玉名市文化財調査報告第二輯

熊本県
玉名市

山下古墳調査報告書

熊本県玉名市教育委員会

序

数千年の歴史の中に、我等人類の祖先は長い自然との斗いの中にきびしい生活を嘗み続けてきた。そしてその時代の生活の中に貴重な遺物を残していつた。今回発掘された山下古墳もその一つである。山下古墳は典型的な前方後円であり、出土品としても石棺のほか数点の遺物、人骨を発見したことは考古学上真に貴重な資料である。

之が発掘には、土地所有者の小森田正光氏をはじめ、文化財保護委員の各位、玉高考古学部の学生諸君のただならぬ御奉仕、御協力をいただき、更には調査団として肥後考古学会長 坂本経典先生及び長崎大、内藤助教授、荒尾三中の三島教諭の御指導をいただき、今日日本報告書の発刊を見るに至つた事は誠に喜ばしい限りであり、茲に御指導御協力いただいた方々に衷心から感謝申し上げます。

一九六八

玉名市教育長

岡

田

勇

目次

一	山下古墳発掘調査に至る経過	7
二	山下古墳の環境	9
三	墳丘	13
四	石棺について	14
五	壺棺について	15
六	遺物	15
七	人骨について	16



一 山下古墳発掘調査に至る経過

標高三八三メートルの木葉山西裾が玉名平野になだれ起伏する丘陵の一つに、水田面よりの高さ約四〇メートルの池称「山下山」といふ小山がある。「木葉山の下にある山」というところからこの名があると伝えられる。その頂上に一古墳があることが古記録に見え存在していた。(昭和四十年八月現在) 玉名郷土の地理、歴史を記した「熊本県玉名郡誌小田村」の項にこのことが次の通りに掲載されている。

△ 山部田の古墳、大字山部田字山下なる梅林村境の山上にあり、今を去る七十年前農夫の此の山を開きて芋畑を作らんとせしに偶長八尺幅四尺の石棺を開掘せり。似て之を当時の莊住屋小森田武兵衛に告ぐ。武兵衛この為に此處に石碑を立てて水くを祭る。その碑文左の如し。

玉名郡内田熊野山之内古墳有焉不知何人葬也 近世開為畑其岸傍掘出大石棺則弘化四年丁未春也定是可高貴人遺骸呼 其畑今係餘作之内故新築土上立石碑永祭之 希欲今後子孫知此意作斯文彫石

時弘化五年龍集成申春二月癸之

小森田武兵衛 敬証

昭和三七年の夏、県(教育庁社会教育課)が実施した全県下の埋蔵文化財調査に協力した際にこの地をたずね、急傾斜の密林の間を探し求め、その所在と現状を確認することが出来た。雑木雑草の中にこんもりと土を盛つた上に前記の銘を刻んだ高さ二、五七メートルのほぼ四角な凝灰岩の碑が二段の台礎の上に立てられていた。石棺発見の動機と立碑の意義を永久に止めようとした立碑者の精神もよくうかがい知ることができた。土地所有者小森田正光氏の話によれば碑の直下数センチのところは石棺が埋蔵されているという。小森田正光氏は、立碑者であり当時の内田郷誌庄屋小森田武兵衛の曾孫に当り、その志をうけ継ぎこの古墳を祭神として、私財を投じ小社屋を新築し「山下神社」としてこれを信仰し部落民の間にも深く尊崇されていた。

この地点から東北へ約五〇メートルの山の尾根伝いに登つたところにも雑木に被われ別個の盛り土の、一見墳丘状を呈するところがあり、前者と合わせると前方後円形の形に見えると考えた。

一方建設省の「菊池川改修其の他工事の計画があり、現玉名大橋を中心に上流約三〇〇メートルの西岸一帯及び下流約五〇〇メートルに

亘る栗岸の断面工事に要する土壌を各方面に物色の末、山下山を形成する土質が最適であると、採土の交渉が土地所有者小森田正光氏等に持ちかけられ、つい所有者もこれを承諾した。

採土工事は昭和三十八年秋頃より開始され規模が極めて大きく、鹿兒島本線鉄道の復線化工事やその他の埋立工事等が加わつて、土の需用は益々多くなり、殆んどその用土がこの山に求められたため、採土工事は急速に進み、すでに山上の礫石近くに達するまでになつてゐた。

昭和四〇年二月、パトロールのため現地を見回つた折、小森田氏の案内で山一帯を亘つて視察した。山の下を通る道路際より剛りとられた急傾斜の断面は可なり奥へ進み、古墳主体までには余裕があつたため、古墳の重要性和山下神社創建の意義を加味し、保存のことについて種々意見を交換した。

その後四月末日玉名高校教諭野木忍二氏同様に現地を巡視後小森田氏宅を訪問し其の後の状況と今後の工事の見通しなどについて聞いてみたところ、実は今晚山林関係者相集まり、工事の進捗状況から考え、神社を石棺共に移転する必要があるため、その作業計画の打合わせをすることにしているという小森田氏の話であつたので驚き、直ちにその計画の中止を要望したところ、小森田氏もこれを承諾した。

翌日玉名市教育委員会に赴き、事態を報告次いでその処置について意見を出し合い、一応現地の状況を見、工事の今後の計画を聞いた上で再検討をすることにした。結局工事考側は国の産振計画に則り業務を遂行しており予定工事に要する土量は山全体を壊し越え、採土の範囲は隣接の山へ及ぼされ、数箇月を経ずして山下山は削減する見込みという。尤も尤も定通りに進まなくとも近いうちになくなつてしまふことは明らかで、すぐに到来する梅雨期には崩壊の恐れは充分にあり、現場保存は絶対望めなく、事前に発掘調査を怠がねばならないという結論に至つた。

そこで速刻熊本県文化財専門委員乙益重隆、肥後考古学会会長坂本純虎の両氏へ打電急報来玉を請りた。乙益氏は上京中で留守のため坂本氏がこれに応じ、玉名市教育委員会例より三ツ本社会教育課長、大徳同社会教育係長、磯田同文化財等と共に現状を視察し、意見を出し合つたが結論を出さず、一応坂本氏に一任し果例への接抄となつた。

その翌日五月四日、県教育庁社会教育課文化係長斉藤正氏が現地へ出張、市教委大徳社会教育係長、同磯田文化担当、田添市文化財保護委員会委員長等と共に現状を再検討しいろいろと協議の結果、現地で現状のまま保存することが絶対不可能であることを認め、止むを得ず緊急発掘調査を敢行し、その記録を残そうというところで意見が一致した。その期日については、今夏を待ち行ふことにしたらという斉藤係長の意見であつたが、間近かに迫つている梅雨期には崩壊の恐れは充分にあることを憂慮し、五月初め連休日を中心に緊急に実施する事が安全策であ

ろりとの意見を生み出し、齊藤保長もこれを認め、取敢えず緊急調査の手續きをととり、追つて正式書類を提出することを約束し、一方玉名高等学校宛協力依頼の文書を送つた。

翌五月五日、意義深い子世の日の佳日を幸わいに、午前十時より市教育委員会より三ツ本社会教育課長、大磯、小代岡保長、磯田保員、玉名市文化財保護委員長宮川専之助氏他委員五名、土地所有者小森田正光氏、山部田区長石原春生氏等出席のもとに飯入れの神事のあと調査団の結団式を挙行、引き続き作業開始となつたわけである。

二 山下古墳の環境

(一) 玉名市平野と菊池川

木葉山の西裾と小岳山東南部の裾と、八喜台地の北裾とが三方から迫り合つて、周圍約一一軒、地面積約七平方軒に及ぶ正三角の盆地状の低地をつくつてゐる。この低地は玉杵名灣の跡と伝えられ、往古は湖水をなしていたと推定される。今ではその形跡も残さず、肥沃な玉名平野を形づくつてゐる。

菊池川が平野の中央を貫流し、支流の錦川が西端を南へ、木葉川が南端を西へ流れ沃野をうるかしてゐる。その周圍に縄文中期以降の貝塚や古墳その他の遺跡が多く残り、南玉名に於ける一大文化圏を形成してゐる。

古墳時代終末期頃の、この地域に残る古墳の中に、大陸又は南朝鮮の新羅、百濟、任那文化の様式を帯びたものが少くない。この頃から起つた大和朝廷の大陸や半島進出をきっかけとして、彼の地の古代文化が頻りにこの地域に輸入されたと考えるとき、有明海を経てこの川をルートとするほかには道はなかつたであらう。

菊池川東方一帯の旧梅林、小田の地域に亘る全面は明治、大正にかけ、北方一帯は昭和四〇年の大規模な耕地整理や、土地改良事業等によつて大きく変貌したが、川の西南方の大坊、高瀬間の一帯に今なお条理の遺構を見ることが出来る。

(二) 山下古墳周辺の遺跡

東部

玉名盆地の東部では、木葉山の西裾が急激に平野に迫り、ゆるやかな台地に恵まれず、生活に不便といふところから遺跡の分布が極めてうすい。

三角形の東麓線にあたるどころ、山下古墳の東南一、五軒の地点に、谷合いの断崖を利用した浦方築山横穴群の他に随月古墳がある。山下古墳に隣接する秋丸台地と上小田の一部に極めて稀薄ながら弥生遺跡を止める。

西部

玉名平野を距て、山下古墳の丘陵と相対する西方台地の、中央で三、七軒の距離になり三角形の西麓線にあたるところで、ほぼ南北に連なる一、五軒の範囲に、南寄りでは保田木、素樸木の阿高、御領、西平等の土器を容する両貝塚、岩崎、立願寺松尾原等の遺棺を中心とする弥生遺跡、蛇ヶ谷山古墳の船型石棺（現在残片のみ）や、東南に尾をひく台地では大塚、小塚の両円墳、及び冷水塚前方後円墳（現市水蓮湖として築え、またその北方谷合いに冷水、富尾等の大横穴群が幾々と続き、小笠山の東南麓にあたる平坦台地に、縄文中期より原始文化が流れるものとして、塔の尾台地の立願寺跡、玉名郡倉及び郡家推定地がほぼ確実性を及び、陀ヶ谷山製鉄跡と共に世に紹介せられるに至つた。

菊池川流域の原始文化を開拓する上に一助をなしたと考えられるこの川の支流に錦川がある。小笠山の東峡谷に源を発する地域の周辺に、大陸色の濃厚な横穴を中心とする原始文化の跡が多く残っている。

南北に長くおよそ四軒に亘り溶結礫灰岩を形成する。この断崖を穿つて六十数基からなる富尾横穴群があり、北へ三、五軒の上流には、途中の五城横穴の一群を経て、固指定重要文化財として世に通ずる因四基から成る石貫ナギノ横穴群、穴観音横穴のほかに太平横穴群等が、旧頼野社の社地を取巻いている。舟の絵の施法や刀の浮き彫り、屋根型の刻み出し、美門の彩色文様や、大陸風の木造本瓦葺き礎築の様式と、千手観音の彫法が築造当初のものと考えれば仏教伝来後の所産であり、仏教文化を加えた豪華さを誇る構成として、古墳終末期の、大陸文化の浸透した玉名独自のすがたであろう。

南部

山下古墳を基点として南方に目を向ければ遠いところで三軒、近いところで一、五軒、東西に続く全長四、五軒あまりあり、三角形の底辺にあたる。八墓、津留、田崎等の地域にまたがる台地上、または裾に幾つもの各時代の遺跡が分布している。桃田の縄文貝塚、船型石棺、横穴群、寺田の円墳群、上津留の円墳、田崎の横穴群等が数えられ、縄文中期より古墳後期に至る文化の発展をこの地域にうかがうことができる。

北部

玉名平野を取り巻く北の一辺にあたる。標高九二、八米の高峰を中心とする西は大坊から東は元玉名の馬出までの一、五軒に亘る玉名山系の南麓には裝飾古墳として早くから全国に紹介された栗指定史跡大坊、永安寺東、西等三基の横穴式小口積み石室古墳と、その中間の岡部落山腹の箱式石棺群等があり、玉名平野北辺に高度の文化圏を形づくっている。

東端の一角には、旧内田郷々社玉名大神宮が鎮座する。遙拝大明神宮とも称し、阿蘇神健甕龍命の女であり、阿蘇四宮、比咩御子神を主神に、景行天皇、玉依姫を合祠する。

当社の社記に「古語ニ相傳フ此地始土車ト云フ蓋シ土蚯蛛ノ名ニ依レルカ玉杵名ニ改則神石ノ事ヲ保其後玉野ト称シ今又玉名ト改ム当社ノ北八丁余ニメ一ツ之塚有則朝敵津傾力城跡ト云傳フ」とある記事にかいても察せられるとより「玉名」の古い名称としての「玉杵名」の由来や其の他の歴史的な事件にまつわる幾多の伝説の中心はこのあたりにある。

景行帝筑紫巡狩の刷り、この地の土蚯蛛討伐に關することや、肥後琵琶物語「都合戦筑紫下り」に語り伝えられる玉依姫の物語りなども地名「玉名」に結び社記の伝ゆるところで、また主人公玉依姫の女神像も当社の東相殿（以前は西相殿）に祠られるなど玉杵名や玉名の本拠に相応しい事例は数多い。

この社地を中心にして、横穴石室式円墳の馬出、小路の両古墳その他の石棺群を合わせ一大古墳群があることも加えて玉名古代文化の本拠を強めるものとなる。社記の教える「津傾の城跡」はどれを指すのであろう。よい資料だと思ふ。

玉名大神宮の一角から北へ二、三軒、弧をつくつた三蔵川に沿つて奥へのぼり横島部落までの間には横穴群、円墳、舟型石棺、箱式石棺等の分布があり、また青木では剣不動、弥陀三尊を中心として二四字からなる大梵字群があり、この地域に開拓され繁栄した最も優れた仏教文化の遺構として重要な存在である。あたかも玉名平野三角形の頂点にあたり、菊池川東岸台地と相接し相対するところは菊水町の区域となる。菊池川の清流を眼下にし、虚空蔵、塚坊主等の陪塚を従えた舟山古墳は銀象嵌鉈太刀を始め、装身具、武器、馬具、その他出土品

の高級と豊富さにおいて広く世に知られ、特に国の宝とされ、大陸、半島系の高度の文化を盛り立てたすがたをそのまま伝えている。
さらに北へ行つたところでは穴観音古墳を筆頭に、円墳、横穴群、箱式石棺、舟型石棺や、諏訪原の縄文遺跡、若園縄文具塚等、地形の
変化に富む山峽の地域を高度に活用した原始文化の遺構は玉名平野文化圏と共に特池川がとりなす大陸性の強い玉名特異のものであろう。

三 墳 丘

木葉山豊雨岳の西方に面して、急傾斜の裾が起伏し、其の一部の、独立したような小丘陵の自然の山頂を利用して、一部整形を施し一見小さな、前方後円墳の営みがあつた。墳丘副囲は恰も大和の茶臼山古墳其の他に見られる様を見事な段築遺構と見まちがうものがあつたが、これは弘化四年頃の山林開墾による段畑の跡かたであることが解つた。

厚さ数十センチ程度の表土下は全面風化した花崗岩土層で、主軸を東北方より西南方へ走らせ、墳丘裾の部分が自然の山地利用のため正確に区分できないが全長約五〇米の前方後円の形に築かれ、副囲の深い谷をその周溝に利用した形になつていた。(実測図才一図参照)

イ 前 方 部

くびれ部より西南に伸びる前方部墳丘裾まで約二八米、高さ約二米、その中心部に軸線に平行して船型石棺が埋葬されていた。これが前記弘化四年発見の石棺である。

前方部の略 中央部の部分に、長さ七米、両端より内側に漸増的に深さを加え深さ八〇釐の範囲黒褐色の土層となつていた。これは前方部上面の地均し工事の遺構かと思われる。他の土層は自然のままの風化した花崗岩の質となつていた。最尖端最も広い幅のところで十二米あつた。

ロ 後 円 部

高さ約四米、径約二・二米の自然の山利用の風化花崗岩土層からなる。東南部は約後円部墳丘の四分の一が削り取られ後円の墳丘を書りていた。これは畑地開墾によるものである。

墳丘上面は平らに均らされ、その東南よりの地表下約一、二〇米の深さのところ船型石棺一基が軸線平行に埋められ、その南面の両隅に殆んど相接するように頭部を内の方へ向い合わせに巨大な土師器の遺構が出土した。

又石棺北側の土層では、ポケット状二段になつた黒褐色土層が風化花崗岩層に入りこんだ部分が認められた。石棺埋葬の際の棺擴か。後円部石棺内外には、数少ないながら各種鉄器遺物があつた。古墳年代の決め手の一つともなる。

四 石棺についで

全長五〇米程度の比較的比較的に小さな前方後円墳内に二個の船型石棺が主軸線と一直線に葬られ割竹式の形で、前方部に一基、後円部に一基である。

イ 才一号石棺

前方部墳丘の直下にあつたもので、長さ二一八センチ、幅八二センチ、棺身は凝灰岩を石材とし船の形にくり抜いて造られ、優美な体裁をもち、棺蓋も同じ石材でかまぼこ型にし、内部を少し浅く舟底型にくり抜いて造られ、どちらも内部に一はいの朱を塗装してあつた。人骨一体が完全に近い姿で遺存されていた。人骨一切に關しては、長崎大学医学部内藤芳篤助教授がこれに當つた。

ロ 才二号石棺

後円部の主体をなすもので、埋葬当時は後円部墳丘の中央に埋葬されたものと思うが、東南寄りになつていた。それは弘化の頃だと考へられる山地開墾によつて、墳丘の約四分の一が削り取られているためである。前方部の才一石棺と一致させ、主軸線上一直線に現地表下約七〇センチの深さに埋葬されていた。棺の南側の両隅に接するように一基づつ大型土師器の壺棺が副葬してあつた。

棺蓋の中央より東北寄りのあたりに径二八センチの丸みの穴を貫通し、その穴ふさぎにか花崗岩の長角の石と凝灰岩（小兎人頭大位）の石をのせてあつた。棺内は墳丘と同じ土がかしつめたように充滿していた。棺底に頸骨四個と其の他の部分が乱雑に入つていた。四体分にしてはあまりにも数少ない。棺身底の両側に石枕の刻みつけがあつた。これらの事については更に研究を要する。石棺の大きさは全長二、三一〇センチ、幅八四センチ、深さ二九センチ。

五 壺棺について

後円部オ二号石棺南側の内隅に接し、棺蓋を内側に向い合わせに、ほぼ水平に埋葬され中にはそれぞれ成人の人骨が収められていた。大型土師の壺を棺身にし、中型よりやや小さい位の土師器蓋を、口縁部を欠いて棺身の口縁にさしこむ様にして装着してあつた。当時の葬制の一例として、今後尚研究の余地があると思ふ。

イ オ一号壺棺

オ二号石棺の西南隅に接する様に埋められ高さ(復元形)七十二センチ、腹部径五七センチ、口径三一センチの土師壺を棺身にし、高さ

三一、五センチ腹部二七センチ大の壺の口縁を欠いて棺蓋にしてあつた。中には成人の人骨の一部分が入つていた。

ロ オ二号壺棺

オ二号石棺の東南隅に接し、高さ(復元形)六二センチ、腹部径五一センチ、口径二六センチの土師壺に高さ三一センチ、腹部径三〇センチ、口径一二、五センチ大の(赤味の加わつた色で、はげ目のある薄く造られた土師器)蓋を首の部分まで欠き棺身の口縁に装着してあつた。中は前者と同じく成人の人骨の一部分が遺つていた。

六 遺物

遺物は後円部、オ二号石棺の内外で、主として鉄製品や、少数の武具類があつた。

イ 石棺内

(1) 銅鏃型鉄鏃 一 オ一頭骨の傍らから出土

- | | | | |
|-----|------------|---|---------------------------|
| (2) | 刀子柄(わらび手杖) | 一 | 才二頭骨の傍ら |
| (3) | やりかんな | 一 | 棺側西北面中央部 |
| (4) | 鉄片 | 二 | 棺中央 |
| | 口 棺 外 | | |
| (1) | やりかんな | 二 | ① 二号石棺と一号蓋棺との間
② 東南面中央 |
| (2) | 鉄斧 | 一 | 二号石棺と二号蓋棺との間 |

七 人 骨 に つ い て

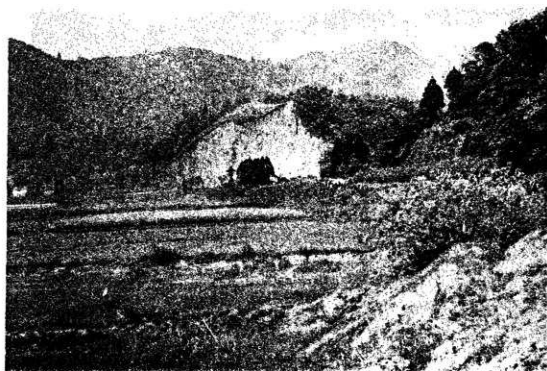
山下古墳より出土した人骨は、前方部才一号石棺より一体、後円部才二号石棺より四体、また才二号石棺南面より出土した才一、才二蓋棺よりそれぞれ一体、合計七体であつた。以下これらの人骨について、略記すれば次の通りである。

才一号人骨(才一号石棺) 東枕伸展位で、比較的保存状態良好な人骨であるが、なぜか両側上肢骨および趾骨が失われていた。また両側腿の腓骨および趾骨が失われていた。頭骨は不完全ではあるが、やや後頭の後向がりがわかれた。骨盤がよく保存され、恥骨弓の大きさをより明らかに女性人骨で、また頸蓋縫合および歯の咬耗度より壮～熟年のものと考えられる。大腿骨より身長一五四、五三センチと推定される。比較的長身であつた。

才二号、三号、四号、五号人骨(いづれも才二号石棺) 石棺内において西端に頭骨一個(二号)、中央より西寄り南壁に接して一個(三号)、また東端に二個(四号、五号)および保存状態不良な四肢骨が見いだされた。才二号人骨は女性、老年、才三号は男性熟年、才四号

は男性老年、才五号は性別、年齢など不明であるが、四肢骨は才四号あるいは才五号のものと考えて差し支えないと思われる。これらの頭骨はいずれも比較的長頭の傾向を示しているが、才三号男性人骨についてみると、頭最大長一八五耗、頭最大幅一四五耗で、示数値は七八、九二であつた。

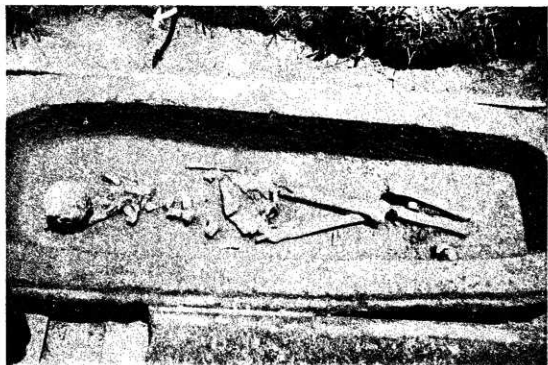
才六号（才一号蓋棺）および才七号人骨（才二号蓋棺）はそれぞれ一つの蓋棺に一体づつが収められ、いずれも蓋棺は径の大きさより考へ合せて、骨になつて後に収められ埋葬されたものと考えられる。前者は男性、後者は女性と推定されるが両者ともに頭蓋結合あるいは歯の咬耗度より比較的若い成人骨と推定される。



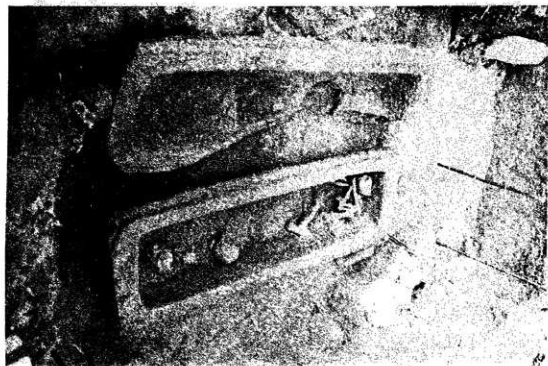
山下古墳遠望 崩壊した山頂4.1mのところの両尖端
左 後円部 右前方部



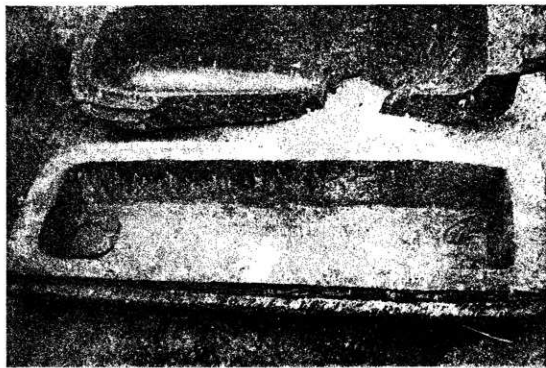
前方部より後円部を望む 方形穴の列は土層検出のためのピット
右下隅は前方部石棺蓋の一部
背景は木葉山西面



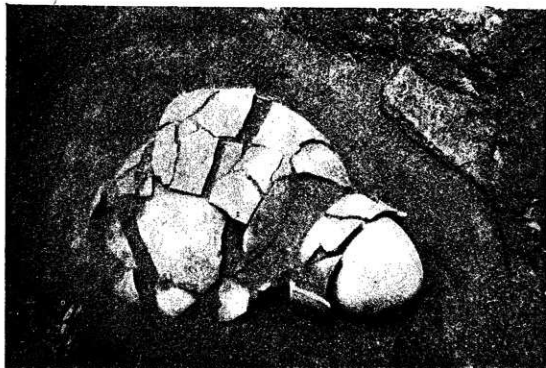
石棺内埋葬人骨 (熟年女性)
推定身長算定 154.5cm



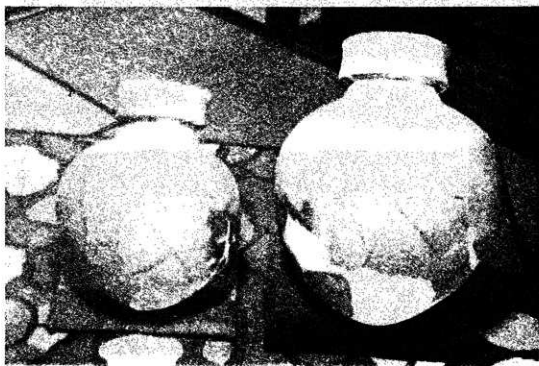
後円部 露出された石棺内人骨及び才2号壺棺
人骨5体分が乱雑に入っていた(内女1点)4体分



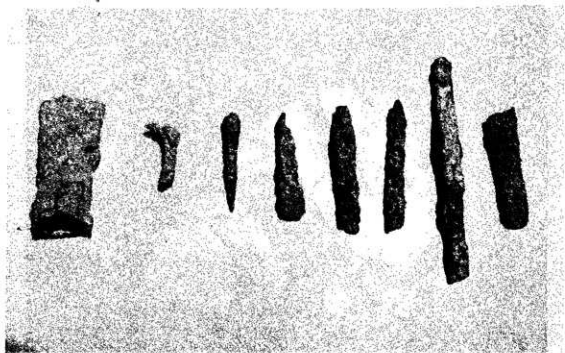
オ2号石棺内部 双方に設けられたまぐらの刻みつけ



後円部石棺 (南方より写す)

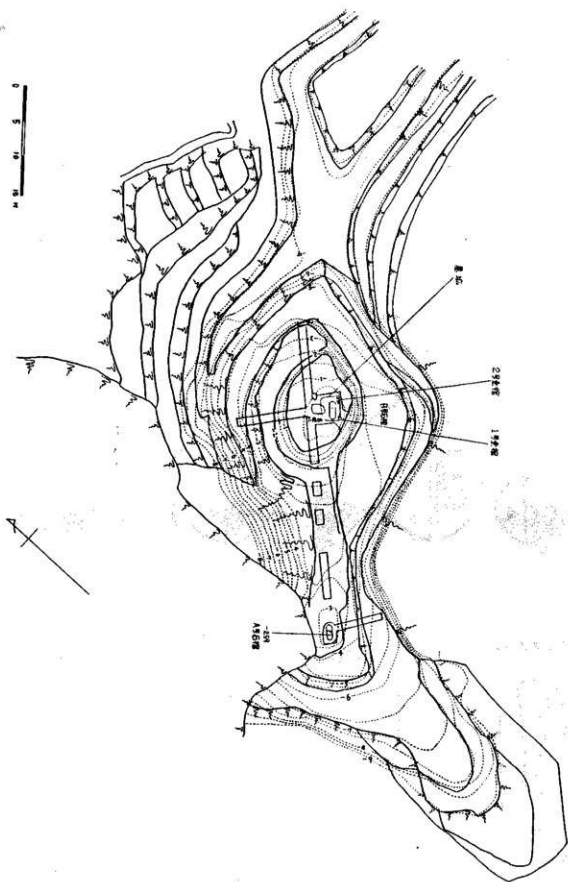


復元された1.2号壺棺々身 左 才2号壺棺
石 ♡ 1 ♡

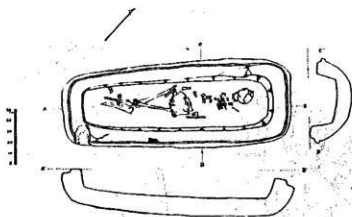


出土遺物 全

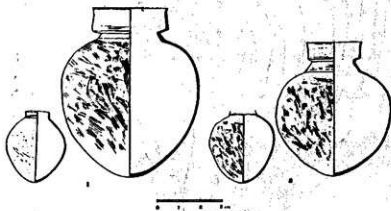
地形測量圖



前方部石棺埋葬人骨及び棺身突刺図

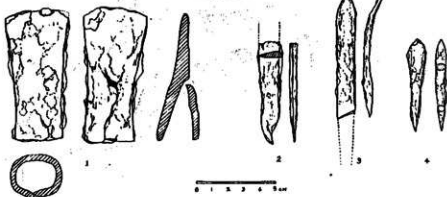


山下古墳後円部 蓋棺突刺図
(舟型石棺 棺側埋葬) 棺身及棺蓋



山下古墳後円部石副葬品

1. 鉄斧 2. わらび手状刀子柄 3. やりがんな
4. 銅鏃型鉄鏃



発掘調査団

団長

坂本 経 堯

肥後考古学会長
日本考古学協会員

調査責任者

田 派 夏 喜

玉名市文化財保護委員会
副委員長

総務

三ッ本 太 門

玉名市社会教育課長

庶務

大 磯 英 雄

玉名市社会教育係長

“

小 代 亮 一

玉名市社会教育係長

“

磯 田 実 次

玉名市文化財担当者

調 査 員

内 藤 芳 篤

長崎大学医学部助教授

“

三 島 格

日本考古学協会員

“

高 木 瑞 穂

玉名市文化財保護委員
玉名高等学校教諭

“

鶴 上 寛 治

玉名高等学校教諭

“

宇 野 木 盈 二

玉名高等学校考古学部OB

“

荒 木 純 治

玉名高等学校考古学部OB

“

伊 東 奎 二

熊本大学法文学部助手

“

熊本県立玉名高等学校考古学部

あ
と
が
き

○ 本調査は玉名市山都田字山下通称山下古墳の緊急発掘調査を昭和四十年五月五日より約十日間にわたり初夏を思わせる様な連日の日さしの中で実施されて各調査団員の献身的なご支援によつて無事終了。数々の貴重な資料を得ることが出来て居りました処こゝに調査資料第三輯として発刊出来ます事を心から慶ぶものです。

○ 本輯は肥後考古学会長の坂本経堯先生、長崎大内藤先生、荒尾三中三島先生、本市文財委田添先生に公私御多用中をそれぞれ執筆負担をお断し出来るだけ精確を期したいと思いましたが年度末もせまり原稿未着の分については故日機会を見て追補することとし、写真、図面等一部別愛の上心ならずも一応印刷しましたので不備の点多々あると思いますが 不悪お許しを願ひ候共御支援の程を。

昭和四十三年三月三十一日発刊

熊本県玉名市教育委員会